日本生活科：総合的学習教育学会　第１５回全国大会参加報告

（日時）　６月２４日（土）　午前：公開事業・授業研究
（会場）　小杉・大島小学校、小杉中学校、富山大学付属小学校、付属幼稚園　計４３の公開授業
（日時）　６月２４日（土）　午後：課題研究発表・自由研究発表
（会場）　富山大学付属小・中学校、幼稚園　１１の課題研究と２８の自由研究発表
（日時）　６月２５日（日）　午前
（会場）　富山県民会館大ホール
シンポジュウム：テーマ「問い直そう！生活・総合の存在意義」
―楽しい学校の「特効薬」、確かな学力の「漢方薬」―
大会記念講演　：演題　「社会は『総合』の能力を求めている」
弁護士・さわやか福祉財団理事長　堀田　力　氏

図書館研究部会に参加して

富山市学校図書館司書　蛯谷　摂

総合的な学習での図書館利用や資料相談は多い。授業のどの場面で図書館が使われるのか、子どもたちの課題は何か、役立つ資料はどれかなど、いつも悩みながら対応している。授業の中で司書の立場からどのような利用者支援ができるのかを学びたいと思い、分科会に参加した。

５年生の「地域自然保護」と２年生の国語教材「お手紙」をベースにした授業事例の発表では、スクリーンに映し出される子どもたちの真摯に学ぶ姿と豊かな表情に魅せられた。始まりは教師が設定したテーマであったのかも知れない。でも、それが子どもたちの現実を揺さぶり、学びたいと心ふるわせる内容ならば、教師の想像以上に子どもはテーマに向き合うのだろう。調べる・まとめる・発表する活動を通して、子どもたちが確かに成長していると感じる授業例だった。

しかし、２例の授業過程に図書はあっても図書館と司書の存在が見えなかった。もし、この授業に調べ・まとめ・発表する活動のアクセスポイントとして機能する図書館が存在すれば、「学び方を学ぶ」面にもっと深まりがあったのではないかと思わずにはいられなかった。

全国的に、司書の配置を含めて小学校の図書館はまだまだ未整備のようだ。その中で、富山県の発表者と参加者から、司書のいる学校図書館の例が示された。司書を持つ図書館は役に立つ、可能性がたくさんある、期待していると伝えてくださったことに励まされた。

学校図書館と司書は、利用されてこそ鍛えられ育てられる。授業に利用できる図書館に成長するためには、司書が「教師といかにコミュニケーションを密に持つか」「どのように情報を発信していくか」がこれからの課題なのではないだろうか。

研究部会の課題の深まりを望みます

富大付属小学校図書館ボランティア　堀地はるみ

研究部会では、他県の発表の物足りなさを感じました。研究発表それ自体としては力が入っていたと思うのですが、内容に本題とのずれを感じました。この部会は、本大会ならでは・・と銘打たれ、項目は【図書】、図書館の利用によるリテラシー向上と生活・総合という課題でした。にもかかわらず、他県の発表では具体的な図書館活用はほとんど触れられず、図書については話の流れの一環という印象を受けました。

そもそも参加者のうちどのくらいの学校で実際に学校の図書館を利用しているのか、司書のいる学校なのか、研究会の課題が理解されているのかを質問したかったのですが、時間切れでその様子はわかりませんでした。

その中で、富山市水橋の先生が、司書との連携について熱く語ってくださった事が有意義でした。年間計画なども司書に渡し、授業につながる打合わせをしていることなど、新鮮に思われた先生もいらっしゃった

ようです。射水市大島の先生も、「図書ではなく図書館と題にあるのは、そこに人がいるからです。人がいるからいいのです。」と発言され、司書のいる学校図書館のよさを語られました。日頃の司書との連携の紹介に実感がこもっており、説得力がありました。

参加した学校司書からの発言もありました。水橋の先生から紹介を受けて発言された蛯谷さんの発言では「学校図書館をアクセスポイントとして使ってほしい」という言葉が印象的でした。なるほど、と思われた方も多かったと思います。こういう研究会に司書からの研究発表の機会があれば、司書のいる学校図書館のよさを多くの先生方に伝える事ができ、より実りの多い成果を期待できるのではと感じ、残念でした。

今回、会場になった富山大学付属学園には、隣接した小中学校舎に２つの図書館があり、小中学校兼務ですが、専門の司書が１名配置されています。小学校には毎日９時から１２時３０分まで、中学校には午後から、隔日で勤務しています。研究当日は、小学校の教室が先生方の休憩室に使用されていました。事例発表はできなくても、学校図書館を開館して、その成果を全国の皆さんに伝えて欲しかったと思いました。中学校の図書館には鍵がかかっていたため、カメラ持参で訪れた県外の先生方から、「今日は閉館ですか」と聞かれたことも書き添えます。

今後は、学校図書館を会場に、先生と司書による合同の研究発表が実現するとすばらしいと思います。富山を会場に【図書】という項目で、学校図書館の利用に関する研究議題が発信されたという事の意義は大きかったと思います。

総合的な学習の中にこそ、真の学力が

富山図書館を考える会　呉羽まゆみ

シンポジュウムと記念講演に参加した。全国大会の実行委員長である富山大学の松本謙一氏は、廃止論も出ている生活科・総合的学習の存在意義は常に『自分』を中核にできる時間が存在する価値にあることを強調し、「総合を生かすも殺すも教師次第」とまとめられた。

記念講演は教育の目的と方法について語られ、総合的な学習の評価方法の確立と大学入試の改革を提言された。最後に「総合的な学習をリードできない教師は教師ではない」ことを強調された。

第１日に参観した授業に対する私の疑問は、このシンポジュウムを通して答えが与えられたように思う。担当教師は、総合的な学習においては教師が素材に惚れ込むことが大事だと語っていたが、その素材が目の前の子どもたちとどうつながっているのかという視点がなければ、子どもにとって自分の課題になり得ない。魅力的な素材であればあるだけ、素材の魅力にあぐらをかいたような、単なる思いつきに終わってしまうのではないだろうか。松本氏が言われたように、キーワードは「自分」なのである。

総合的な学習が子どもにとって本当に力をつけていくことができるようになるかどうか、結局は教師の力量であるということを実感した大会であった。総合的な学習の存在意義はよく理解できたが、限界も見えたと言えよう。シンポジュウムの一人である小杉小学校の発言からは「総合的な学習は教師も育てる」ということが伺えた。そこに可能性を見出すことができるだろうか。